

調査報告

あかうらおおわり 赤浦大割遺跡

安 英樹

1 はじめに

赤浦大割遺跡は七尾市赤浦町地内に所在し、赤浦潟の南東に開析された谷の一支谷で、低地に面する東向きの丘陵裾部に立地する。発掘調査は石川県立埋蔵文化財センターが行っており、小文ではその遺構・遺物を紹介したい。調査の原因、期間、面積、担当者などは下記のとおりである。記録資料と出土遺物については石川県埋蔵文化財センターで保管されている。

調査原因 県営ほ場整備事業（西湊工区） 調査期間 平成8（1996）年4月19日～4月26日
調査面積 40m² 担当者 本田秀生、安英樹、松山温代、河村美紀 補助員 大藤雅男

2 調査区

調査区は排水路及びパイプライン工事によって遺跡が破壊される部分に相当し、谷口を南北方向に貫く細長いトレンチである。記録の基準はN - 2° - Wを指す水路の中心軸線であり、調査区北方のT字状交点から南へ13mの地点を起点（0m）とし、起点から南へ向かって任意座標を設定した。

層序は上位から現農道盛土、盛土、遺物包含層、地山と推移する。遺物包含層は砂質土基調で、層位の上下や土質により上位から～に三分できる。～は遺跡の最終埋没土であり、盛土や部分的に見られる旧耕作土（第4図東壁層3・4）の直下に位置する。～は遺構の埋土や生活面と一体化した土壤であり、遺構や地山を直接被覆する。～は低地への堆積土であり、地形が下降する地点にのみ見られる。調査区東・西・南壁土層の対応関係は下記のとおりである。

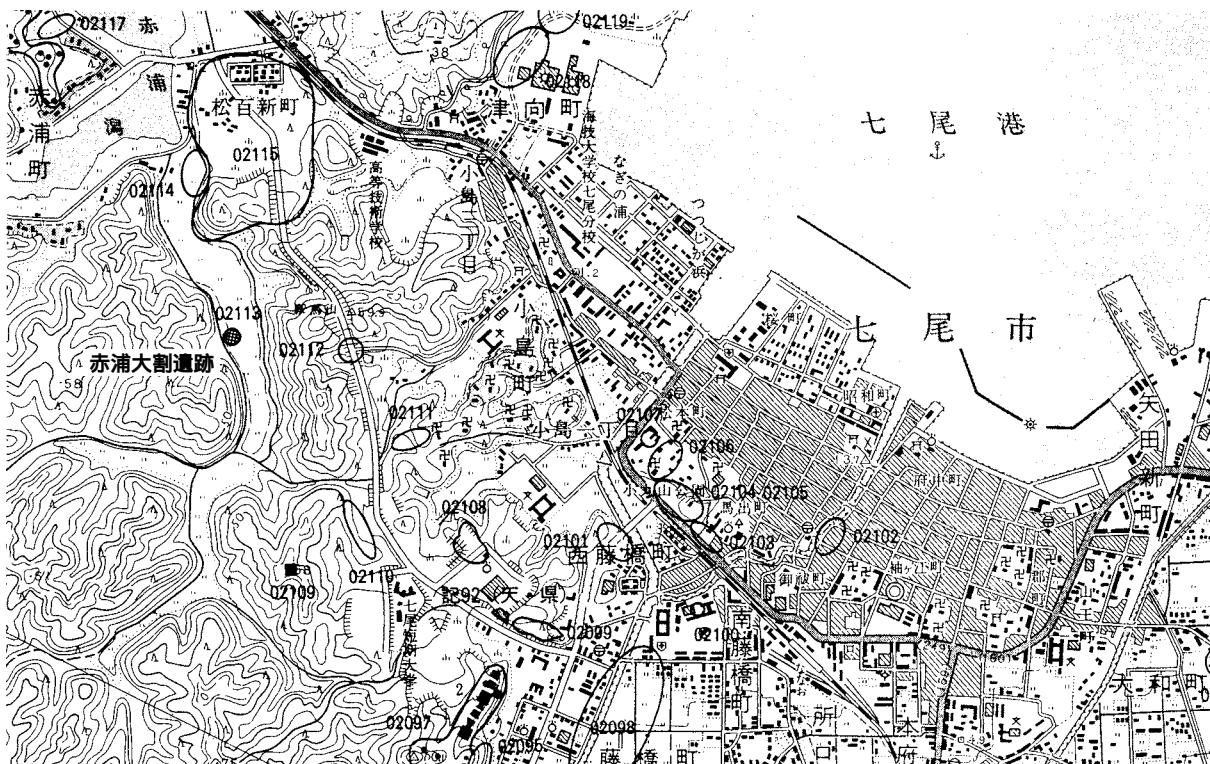
遺物包含層	第4図東壁層5・6	第3図西壁層5・6	第3図南壁層4
遺物包含層	第4図東壁層8・9・13・29	第3図西壁層7・9・10	第3図南壁層7
遺物包含層	第4図東壁30・31	第3図西壁層11・12	第3図南壁層8・9

地山は灰色～青灰色の砂である。地山面の標高は北西端で2.8m、北端で2.6m、起点から11m地点では2.3m、南端で2.1mと落ち込んでいく。地形的には丘陵側の西が高く、赤浦潟へ向かう北が低くなるはずであるが、南には小支谷の谷央が存在しており、それを反映した落ち込みであろう。また、北西端は丘陵裾が伸びていたものが削平されており、段状となる。

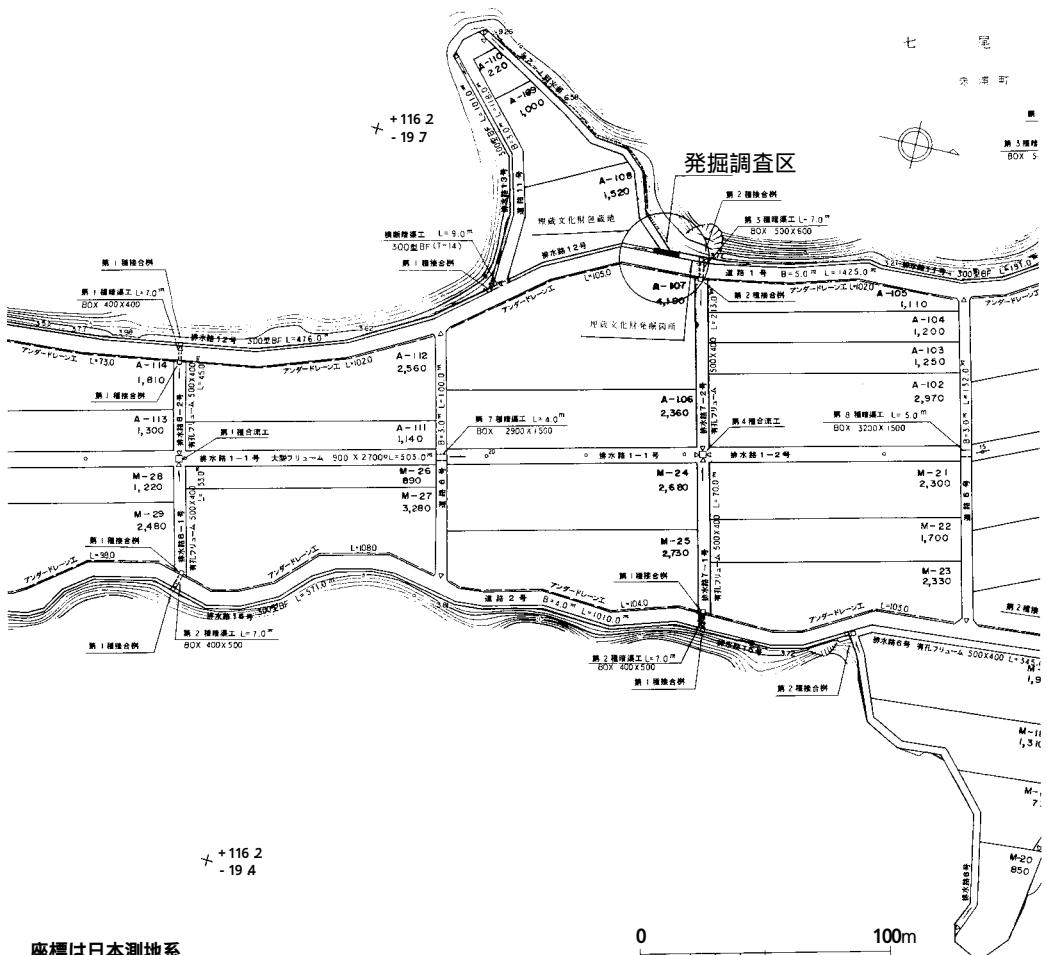
3 遺構

遺構は溝（SD）3条、穴（Pit）8基を検出した。北側のSD1と南側のSD3に挟まれた部分に遺構が集中しており、以北は希薄になり、以南は穴群のみとなる。

溝 SD1は遺物包含層の下位で検出された。幅2.2～2.6mで、東西方向に走る。深さは50cm以上に達するが、崩れやすいため底まで掘り下げられなかった。堆積は、東壁側は有機質土が積層しているが、西壁側は砂中心であり、地点により異なる（第3図・第4図）。埋土の上面でPit8が検出さ

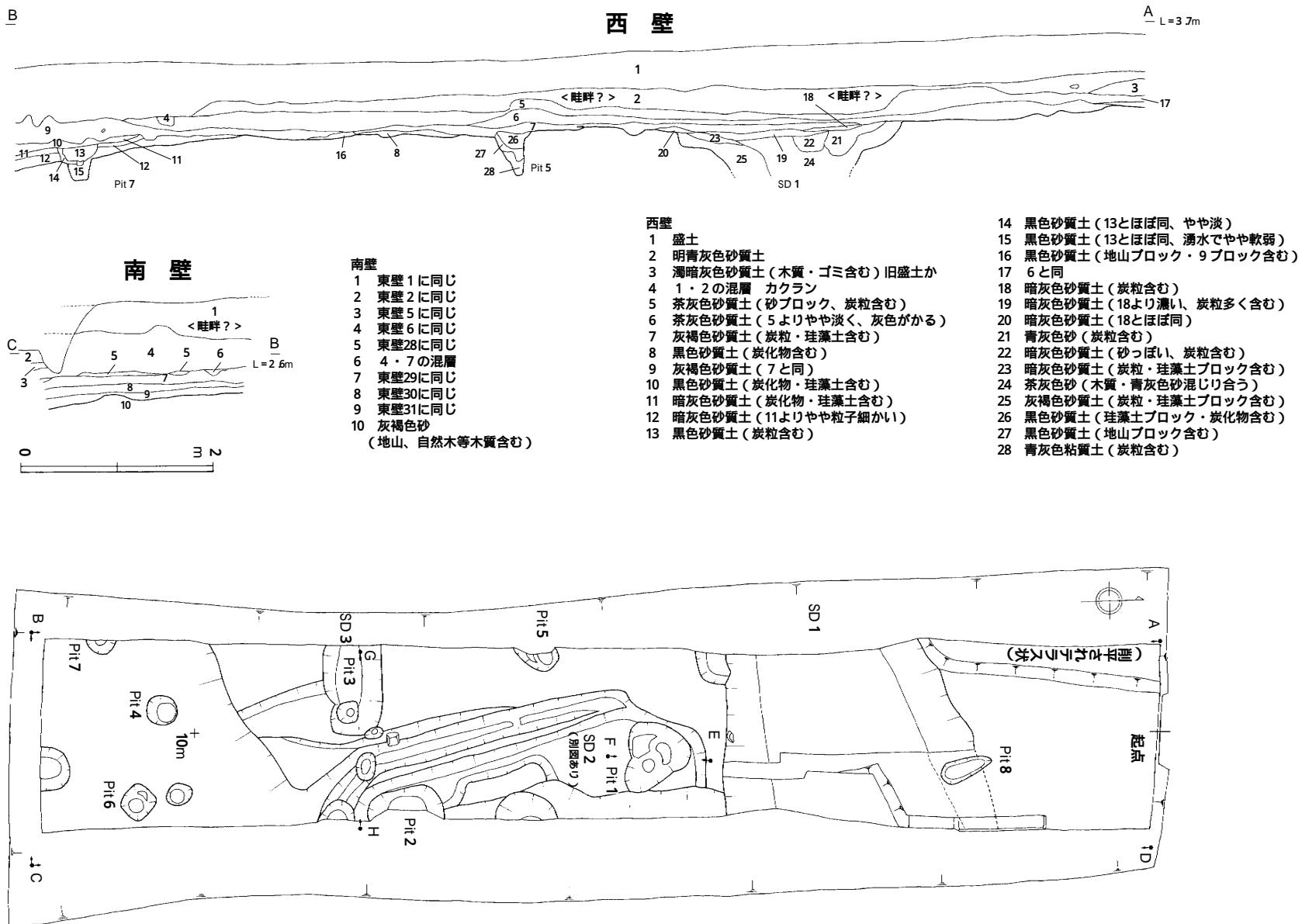


第1図 遺跡位置図（国土地理院25万分の1地形図「七尾」複製『平4北複第58号』を転載）

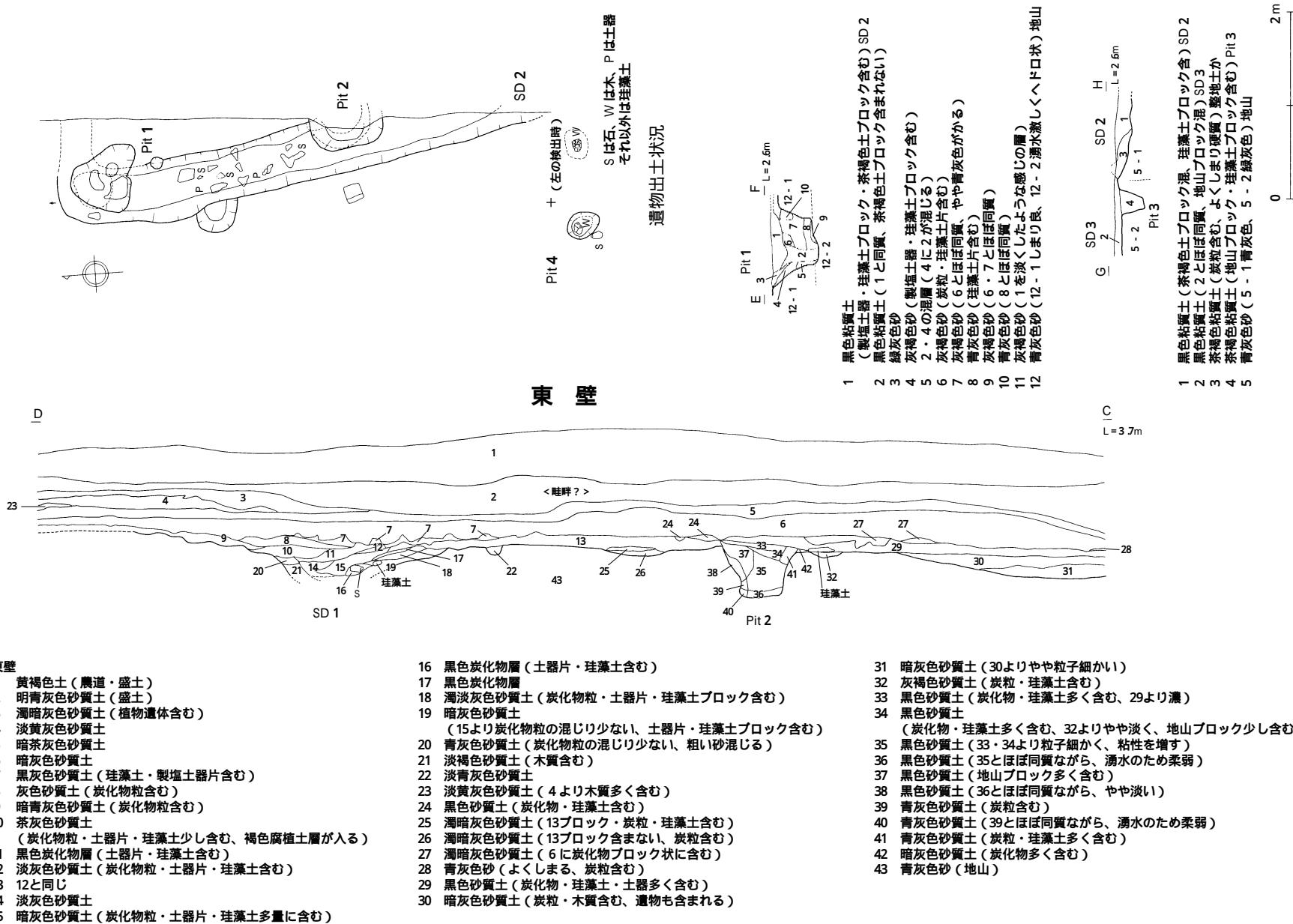


第2図 調査区位置図 (S = 1 / 3,000)

第3図 遺構実測図1 (S = 1 / 60)



第4図 遺構実測図2 (S = 1 / 60)



れ、その延長（第4図東壁層13）を切り込んでPit2が掘り込まれている。SD2は遺物包含層と一緒に的な埋土で検出され、重なっているPit1・Pit2よりも後出する（第4図）。南北方向に走り、北側はほぼ直角に東へ折れ曲がる。幅54～64cm、深さ6～12cmを測る。北側ほど浅くなり、底面の標高も高くなっている、北端ではほぼ痕跡を残すのみである。SD3はSD2と同じ層準で検出され、重なっているPit3よりも後出する（第4図）。幅は最大で60cm、深さ7cmを測る。

穴 不整形なPit8を除けば、整った形状から柱穴の可能性が高いが、調査区の制約により建物は復元できない。全て遺物包含層の下位で検出されているが、Pit2はSD1埋土の延長を切り込んでおり、Pit5とPit7はSD1と同じ層準で検出されている（第3図・第4図）。Pit4とPit6は後者と同様な検出状況である。Pit1とPit2は径70～80cm、深さ50～60cmと規模が大きく、整った断面形など共通する点が多く、間隔は2.5mとやや広いが、同じ掘立柱建物跡の柱穴となる可能性が高い。この他の穴はPit8を除けば径30～50cm、深さ24～50cmとやや規模が小さい。ただし、Pit5とPit7は調査区外へ伸びているので確定したものではない。Pit4とその東側の穴には木柱根が残っていた。

その他 面としては調査していないが、東・南壁面で1箇所、西壁面で2箇所ずつ、遺物包含層上面の盛り上がりが確認でき、帯状の隆起が復元されることから、水田の畦畔が存在した可能性がある。高さは10cm前後、幅は東壁側が上端で1m、西壁側は40cmと90cm、南壁側は20cmである。上下層（東壁・西壁とも層5・層6）で見られることから新古2時期が想定される。

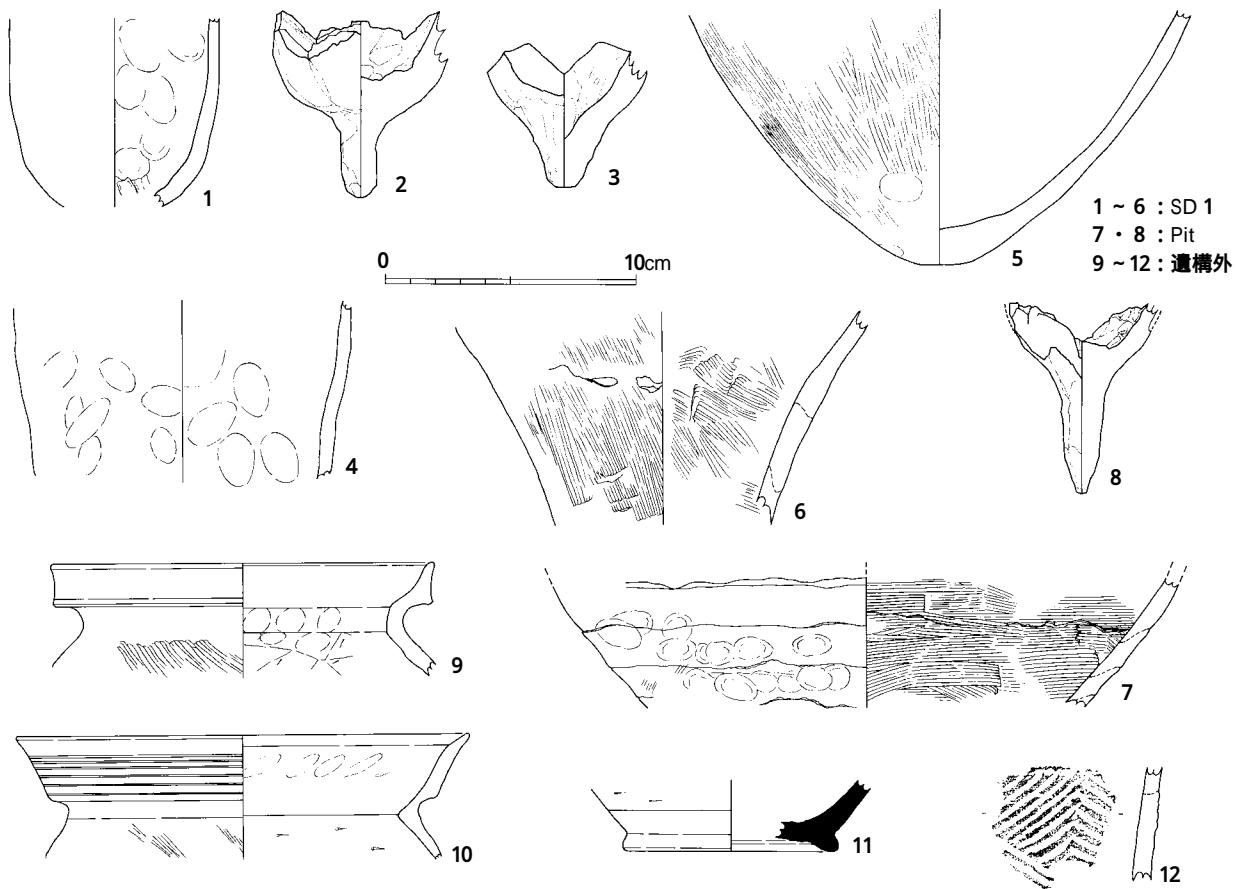
4 遺物

遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、製塩土器、珪藻土塊等が出土しており、パンケースL型に2箱の量がある。遺物の大半は製塩土器・珪藻土塊であり、調査区の全域と大半の遺構から出土している。遺存の良い遺物を選び、12点を図化した（第5図）。

溝 SD1からは弥生土器、製塩土器、珪藻土塊、木製品、モモ種子が出土している。1～3はSD1上層出土で、すべて製塩土器である。1は下位が紡錘状となる器形から棒状脚が想定される。2は緩やかに面をもつ底部に短い棒状脚が付く器形で、棒状脚は先端のみ橙色を発する。内面には粘土を貼り付けた痕跡があり、棒状脚を接合した可能性がある。3は底部に面を持たずに棒状脚が付く漏斗状の器形である。4はSD1下層出土の製塩土器で、薄手筒形の器形である。5・6はSD1出土であるが層位不明である。5は弥生土器であり、やや大型の安定した平底甕である。内外面とも炭化物が付着するが、外面はスス、内面はコゲであり、外面下半は被熱により剥離・摩耗している。6は大きく広がっていく器形の製塩土器であり、7と同一個体の可能性がある。SD2からは製塩土器と焼けた珪藻土塊・レキが集中して出土している。SD3からは製塩土器が出土している。

穴 Pit1からは土師器、製塩土器、珪藻土塊が出土している。7はPit1出土の製塩土器で、大きく広がっていく器形である。6とは遺構が異なるが、胎土や色調、質感が共通し、ともに同一個体らしい破片が多く出土しており、棒状脚の底部を含む。同一個体とすれば6が下位、7が上位でかなり括れの強い器形となろう。Pit2からは製塩土器、珪藻土塊が出土している。Pit3からは製塩土器、土師器が出土している。Pit4からは製塩土器、弥生土器が出土している。Pit6からは製塩土器が出土している。8はPit6出土の製塩土器で、細長い棒状脚が付く。内面には粘土を貼り付けた痕跡があり、棒状脚を接合した可能性がある。Pit8からは弥生土器、製塩土器が出土している。

その他 9・10は弥生土器で、調査区南端の遺物包含層から出土した。9は有段口縁無文甕で、口径15cmに復元される。口縁帶は短く丸縁、頸部は筒状で、胴部は厚い。10は有段口縁有文甕で口径



第5図 遺物実測図 (S = 1 / 3)

遺物観察表

番号	仮番	種類	器種・部位	外面調整	内面調整	色調	胎土
1	11	製塙土器	棒状脚・胴	摩耗	指頭押圧、摩耗	淡橙褐	径0.5~4mm石英・長石多、赤色粒、海綿骨片
2	7	製塙土器	棒状脚・底	指頭押圧、ナデ	指頭押圧	黄褐	径0.5~2mm石英・長石多、赤色粒
3	11	製塙土器	棒状脚・底	ナデ	シボリ	黄橙褐	径0.5~2mm石英・長石多、赤色粒
4	14	製塙土器	棒状脚?・胴	指頭押圧	指頭押圧	にぶい橙	径3mm以下石英・長石多、赤色粒、海綿骨片、雲母
5	9	弥生土器	甕・底部	ハケ	ケズリ?	暗橙褐	径0.5~5mm石英・長石多
6	2a	製塙土器	棒状脚?・胴	ハケ	ハケ	灰黄	径4mm以下石英・長石多、海綿骨片、雲母
7	2b	製塙土器	棒状脚?・胴	指頭押圧	ハケ	灰黄	径2mm以下石英・長石多、海綿骨片、雲母
8	1	製塙土器	棒状脚・底	ハケ	指頭押圧	黄褐	径0.5~2mm石英・長石多、海綿骨片
9	3	弥生土器	甕・口縁	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、指頭押圧、ケズリ	にぶい黄橙	径0.5~5mm石英・長石多、海綿骨片、雲母?
10	4	弥生土器	甕・口縁	ヨコナデ、擬凹線、ハケ	ヨコナデ、指頭押圧、ケズリ	浅黄橙	径4mm以下石英・長石多、海綿骨片、雲母
11	10	須恵器	瓶・底部	ロクロナデ、ケズリ?	ロクロナデ	灰	径0.5mm以下石英・長石少
12	5	繩文土器	深鉢・胴	文様(半隆起線)	ナデ	灰黄褐	径1mm以下石英・長石多

18cmに復元される。口縁帯は長く尖縁、内面はくの字状に屈曲し、胴部は薄い。9は谷内・杉谷編年の7期、10は同8～9期の時期である¹。同地点・同層では製塩土器や珪藻土塊と混在して弥生土器が比較的多く出土している。11は遺物包含層から出土した須恵器である。底径8cmに復元される小型有台品であるが、ケズリの位置から食膳具ではなく貯蔵具とした。内面に降灰している。遺物包含層からはこの他、珪藻土塊、鉱滓、モモ種子が出土している。12は調査区周辺で採集された縄文土器の深鉢である。文様は半隆起線を結節状に配するモチーフであり、縄文前期後葉の福浦上層式に比定できる。

5 まとめ

検出された遺構については、柱穴など居住に伴うものが主であり、前後関係や規模の類似から概ね期（SD1下層、Pit3～7）期（Pit1・2、やや時期幅を持つがSD1上層）期（SD2・3）に変遷を整理できるが、狭小な調査区なため詳細は不明である。出土した遺物は製塩土器と珪藻土塊が主で、製塩土器の形態が棒状脚で占められる²ことから、遺構の時期は古代に限定でき、Pit6出土の8から期の上限は8世紀代、SD1上層出土の2から期の下限は9世紀代の年代が与えられる。期は小破片をみる限り、また製塩土器自体の終末を考えるなら、期と大きく隔たらない年代となろう。遺物包含層についても出土遺物から古代の堆積と考えたい。珪藻土塊はほぼすべて被熱しており、付近で産出されたものが炉材として使用されているようである。

以上から、遺構では居住、遺物では製塩の活動が同時期に窺われ、両者の複合したものが赤浦大割遺跡の実態となる可能性が高いことが指摘できよう。類似した遺構・遺物は、周辺の赤浦やまあと遺跡³、能登島町無闇カキノウラ遺跡⁴等でも確認できるが、本例は狭小な調査区のため詳細には対比できない。ただし、遺跡自体の小規模さや、小規模な建物遺構の存在、底部棒状脚付き製塩土器の卓越、珪藻土塊の利用などは、七尾湾岸の製塩遺跡でかなり普遍的な存在であることが近年の調査で確認されつつある。赤浦大割遺跡の資料もその一例となるものであろう。

注

1 石川県立埋蔵文化財センター『谷内・杉谷遺跡群』1995年

2 製塩土器の底部を計量した結果、棒状脚は20個体確認しているが、台脚や平底は確認できなかった。

3 財団法人石川県埋蔵文化財センター『七尾市赤浦やまあと遺跡』2001年

4 石川県能登島町教育委員会『無闇カキノウラ遺跡』2000年



調査区全景（南から）



調査区全景（北から）



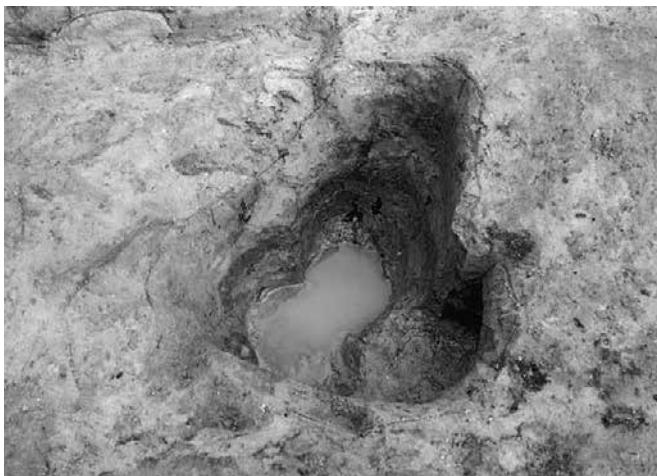
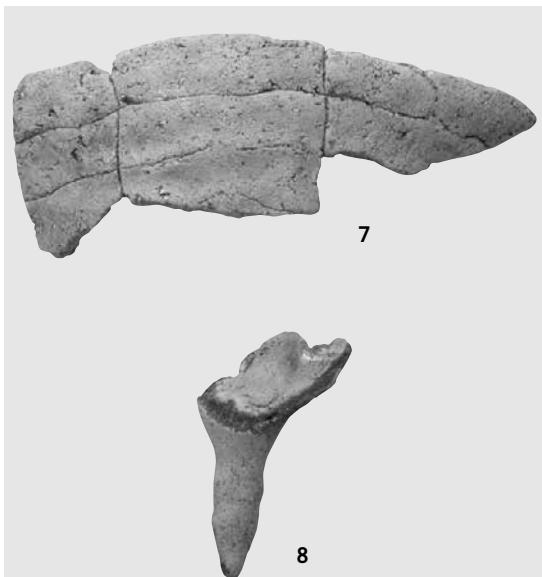
SD 1 遺物出土状況（東から）



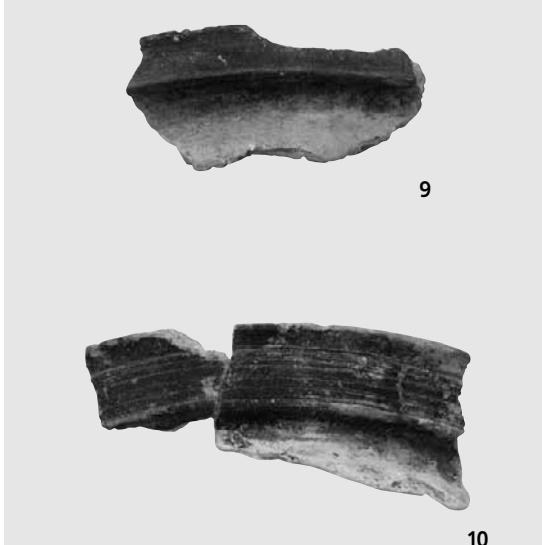
出土遺物 1



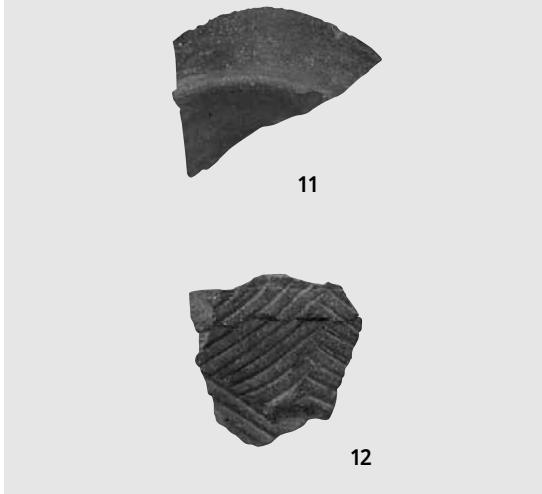
SD 2 遺物出土状況（北西から）



Pit 1 全景（西から）



Pit 2 土層断面（西から）



出土遺物 2